

# 大谷學報

第三卷 第三號

昭和二十六年十二月二十日發行

---

宗教への教養……………前田 博……………(一)	三信釋の論理……………太田 祖 電……………(二四)	維摩經佛國品の原典的解釋(下)山口 益……………(四六)	大谷本廟留守職考(下)……………多 屋 弘……………(五九)	新刊紹介……………(七)	學會彙報……………(八二)	昭和二十五年秋季公開講演會要旨……………(八〇)
-------------------------	----------------------------	------------------------------	--------------------------------	--------------	---------------	--------------------------

---

大 谷 學 大

大 谷 學 會

## 大谷學會會則

第一條 本會を大谷學會と稱し、事務所を大谷大學内に置く

第二條 本會は佛教學・哲學・史學・文學並にこれに關連する諸般の研究及びその發表を目的とする

第三條 本會の會員は大谷大學教職員・學生及び本會の趣旨に賛同する者とする

第四條 本會は左の事業を行う

一、年四回機關誌「大谷學報」を發行する

二、毎年春秋二回公開講演會を開く

三、隨時研究會を開催する

四、その他圖書の出版等必要な事業を行う

第五條 本會に左の役員を置く

一、會長 一名  
二、理事 二名  
三、委員 十名

第六條 役員の任務を左の通り定める

一、會長は本會を代表し、會務を統理する

二、理事は會長を補佐する

三、委員は編集・庶務・會計の事務を分掌する

第七條 役員の選出及任期を左の通り定める

一、會長は大谷大學々長之に任ずる

二、理事は大谷大學々務部長並に庶務部長之に當る  
三、委員は大谷大學教授・助教授の互選により、その任期は二年とする

第八條 會員は機關誌「大谷學報」の配布を受け、本會主催の會合に出席する事が出来る

第九條 會員は會費として年額金貳百圓を納めるものとする

第十條 本會則は大谷大學教授會の決議によらなければ變更する事が出来ない

附則 本會則は昭和二十四年五月十八日から實施する  
以上

## 大谷學會役員

會長 山口 益

理事 野上俊靜 太宰不二丸

委員 世良壽男 外村完二 稻葉秀賢 多屋賴俊

三品彰英 横超慧日 藤島達朗 中田勇次郎

坂本 弘 池田義祐 (順序不同)

補助委員 阿部行人

會計委員 吉田嘉一郎  
囑託

---

THE  
OTANI GAKUHO  
(THE JOURNAL OF  
BUDDHISM AND CULTURAL SCIENCE)

---

CONTENTS

Articles:—

Schleiermacher on Religious Education

.....H. Maeda

On Shinran's Comments on 'Three Faith'

.....S. Ota

Textual Explanation of the Buddhakṣetra-

Parivarta of the Vimalakīrti Sūtra.....S. Yamaguchi

On the *rusu-shiki* of the Ōtani Main Mausoleum

(On the Office and Right of the Keeper of

Shinran's Burial-place).....H. Taya

Book Review

News and Notes

---

PUBLISHED FOR THE OTANI SOCIETY  
THE OTANI UNIVERSITY  
KYOTO, JAPAN.

## 編集後記

波瀾の多かった年々、混亂と失意の底に喘いだ二十世紀前半を送つて、早や後半の第一年を迎へた。終戦後六年、再び世界は騒然としてゐる。どの道を進まうとも、前途は恐らく多難であらう。今年是我々にとつては、いろいろな意味で、運命の年であらうか。此の一年何よりも先づ平和であつてほしい。何時の世でも、平和は常に學問と文化との慈母である。宿業に結ばれ、因縁の糸に操られつつも、唯一つ、平和なれかしと念じないではあられない——それは私のみならず國民すべてのつつましい願ひであらう。しかし乍ら運命は、通路を切開いて行く内部の力である。宿善まかせとはいひ乍ら、否、宿善まかせであればこそ、内面的な一となみの努力を忘れてはならない。

第三號を漸く諸賢の御手許に御送りす

る。前號からの山口教授の「維摩經佛國品」の解釋も、三回に亘つた多屋氏の「大谷本廟留守職考」も本號で完結した。山口教授のいつも乍らの周到緻密な所論もさることながら、多屋氏の適確な資料の引用と、明快な推論と、眞摯な態度とは、氏が地方の研究に不自由な環境に居られるだけに、一層頭の下る思ひがする。かかる優れた論文を掲載し得たのを喜ぶと共に、氏の一層の御活躍を期待したい。尙、公開講演の要旨は、國文學研究室の山本氏と、圖書館の佐々木教悟氏とを煩はしたが、講師の兩先生にも、執筆の兩氏にも、此處で改めて謝意を表したいと思ふ。

嚴寒の候を控へ、諸賢の御自愛を念じて止まない。

(二六、一、一)

昭和二十六年二月十五日印刷  
昭和二十六年二月二十日發行

〔非賣品〕

京都市上京區小山下總町

大谷大學内

大谷學會代表者

編集兼印刷者 野上俊靜

京都市上京區小山下總町

大谷大學内

發行所 大谷學會

電話西陣一六四〇